

南北モンゴルの間

——内モンゴルとモンゴル国の生業論的比較——

尾崎孝宏

はじめに

本論は、究極的には南モンゴルすなわち内モンゴルにおける牧畜の現状を、北モンゴルすなわちモンゴル国におけるそれとの比較を通じて明らかにしようとするものである。だが具体的分析に入る前にまず、本論の基本的視座と戦略について述べておきたい。

まずは、南北モンゴルの間の断絶と連続に関する問題から始めよう。両者の断絶については、まず何より別の国家、前者は中華人民共和国であり後者はモンゴル国に属することが挙げられることは論を俟たない。そして、つい十数年前まで南北モンゴルの境界は中ソ対立の最前線という意味

合いを持つており、これにより両地域の交流は極端に妨げられてきたことも周知の事実である。つまり、両者の断絶に関しては枚挙に暇はない。

また現在も、仕事や就学などで両地域を往来している人々を除けば、お互いに関する知識は皆無に近い。内モンゴルでテレビを見ても、アメリカや日本の風景は毎日のように画面に登場するが、モンゴル国が画面に登場することは稀である。ウランバートルではケーブルテレビを通じ内モンゴルのテレビ放送（内蒙古電視台）を見ることはできるものの、国外向けの番組編成となっておりニュースなどは流れないため、単にモンゴル語で放送されている中国のテレビ番組という以上の意味を持たず、そこを通じて内モンゴルの現状を知ることができない。両地域に住む一般の人々

はお互いを「内モンゴル」「モンゴル国」という記号とそれに付随する漠然としたイメージとしてのみ認識している、というのが現実である¹⁾。

一方、両者の連続を語る際には、断絶を語るよりもはるかに困難を伴う。そもそも、断絶の論拠となる「違い」を示すというのは事例を示せばほぼ事足りる行為である。個々の事例は、何らかの点において何か異なっているのが普通である。それに比べて、連続の論拠となる「類似」を示すのはまず何らかの基準である事象をカテゴライズし、その範囲内での同一を示す必要があり、しかもそのカテゴライズが何らかの「もつともらしさ」を伴っていないければならない。つまり、そこでは説得力のある比較が必要となる。

それでは、南北モンゴルの境界を越えた連続性を持ちうる事象には、何があるだろうか。まず、自然環境を想起してみよう。そもそも南北モンゴルの境界で降水量や気温などの自然環境がドラスティックに異なっており、そこを後付け的に人間が境界としたことは、当該地域の気候データなどを見る限り、考えにくい。仮に現在、両地域の景観が大幅に異なっていたとしても、それは何らかの人為的活動の結果であると解釈するほうが自然であろう。内モンゴルのある地方から見て、近くにあるモンゴル国領内より遠くにある内モンゴルの他地方のほうが自然環境的に類似している、とは言えないだろう。

次に、人間活動についてはどうだろう。古くから、南北モンゴルを問わず、この地域での主な生業として牧畜が存在した、という事実²⁾に異議をさしはさむことは困難であろう。もちろん、現在内モンゴル、特に中国内地との境界に近い側において農耕化が急速に進行しているという事実は筆者も知るところではあるが、だからといって内モンゴルから牧畜が消滅してしまったというわけではない。また、牧畜が自然環境により大きな制約を受けることは言うまでもなく、ある一定の自然環境下で行いうる牧畜には一定の限界が存在することが想定しうる。つまり、南北モンゴルの境界を越えた牧畜の連続性というものは想定可能である。しかも、両地域とも牧畜の担い手は基本的にモンゴル族である。

ならば、同じモンゴル族なのだからという理由で、文化的連続性もア priori に想定しうるだろうか。この問題に対して筆者は、現在のところやや慎重である。もとより筆者は、内モンゴルとモンゴル国のモンゴル族がいかなる意味でも似ていない、などと妄言するつもりは毛頭ない。しかし、文化人類学を専門とする筆者が述べるのはあまりに皮肉ではあるが、文化という単語の指示範囲があまりに広すぎ、「文化」そのものを比較するとなると往々にして学問的厳密さを欠いたイメージの披瀝に終わってしまう危険性が高い。



南北モンゴルおよび調査地点の位置関係

筆者は、学問の場で議論を行う以上、客観性とそれを支える実証的データ、そして説得力ある比較を行いうるだけの条件設定は必須であると考えている。そしてこれが、本論の議論の中心を牧畜という生業における、しかも隣接する南北モンゴルの二地域比較に据えた理由である。つまりこれにより、社会環境の差異、特に異なる国家に属するという事実が牧畜のあり方にもたらす影響を明らかにすることができるとができる。

具体的な議論の対象地域は、内モンゴル自治区シリンゴル盟のいくつかの旗・市とモンゴル国スフバートル県のオンゴン=ソムである(地図参照)。本地域を選択した理由は筆者自身が現地調査データを有する点に尽きるが、自然環境的には東部モンゴルの平原地域に属し平坦な草原が広がっており、特にその北東部において草生が良好である。

例えばシリンゴル盟の草原は、内モンゴルにおいては北部のホロンバイル盟と並ぶ良好な牧草地であると一般に認識されている。なお、本論で利用するデータは、すべて筆者が現地調査によって収集したものである。

さて、本論のメインとなる部分は生業の要素別比較であるが、まず始めに両地域における生業の現状を大きく規定することになっている。土地制度の違いをここで述べておきたい。内モンゴルの現在の土地制度を規定しているのは、一九八〇年代前半に開始する国家規模での経済政策の変更、

すなわち人民公社の解体とそれに続く生産責任制の導入である。これは農耕地域においては直接的に農地の世帯に対する分配を引き起こしたが、内モンゴル牧畜地域においてはまず家畜の私有化、そしてやや遅れる形で牧地の世帯に対する分配を引き起こした。こうした、家畜は完全に私物であり、牧地に関しては期限付きの占有権と用益権の分配であり自由な処分権こそ持たないが、差し当たり一〇—三〇年程度のタイムスパンでは限りなく私有に近いという状況が、内モンゴル牧民が生業活動を行う上での前提条件となっている。

一方、モンゴル国は一九九〇年代初頭に内モンゴルと類似した経済政策の変更を経験し、ネグデル（農牧業協同組合）が解体され、家畜の私有化が行われた。ただし、内モンゴルと決定的に違うのが、牧地の私有は現在に至るまでに認められていない点である。つい最近の二〇〇三年五月一日にモンゴル国では土地所有法が施行され、定住地域の宅地や農地の私有化が開始したが、現在のところ牧地は私有化の対象となっていない。もちろん、これはモンゴル国において牧地が完全にフリーアクセスであるということの意味ではない。例えば雪害などの自然災害が発生した場合に備えて、日常的には立ち入りが禁止された地域などが現実に存在する。しかし、現状において、モンゴル国では牧地選択の自由度が内モンゴルとは比較にならないほど高

いことは言うまでもない。

生業の要素別比較

(一) 住居

一般に、内モンゴルの牧畜地域とモンゴル国の牧畜地域の景観を比較した場合、極めてわかりやすい対照の一つに住居の違いを挙げることが可能である。ごく簡単に言ってしまうと前者が固定家屋、後者がゲルであるが、ここではもう少し詳細にその内実を検討することにした。

現在シリングルにおいて、モンゴル牧民が居住する最も一般的な固定家屋は幅一五m、奥行き一〇m程度のレンガ造りの平屋である。建設に携わる労働者がシリンホト市や旗中心地に居住する漢族である点からも容易に想像がつくように、基本的にその構造は中国北部の漢族のものと大差なく、寝室には台所からの排煙を引き込んだオンドルがしつらえてあることが多い。図1、図2に筆者が二〇〇一年夏にアバガ旗で実見した固定家屋の見取り図を示しておく。なお、前者は比較的小規模な例、後者は比較的大規模な例である。

こうした固定家屋の建設年代は、例外なく一九八〇年代後半以降である。建設年代の判明している事例を挙げて、



図1 固定家屋の例1



※全ての寝室にオンドルあり

図2 固定家屋の例2

一九九三年(西ウジュムチン)、一九八七年(アバガ)、一九九一年(シリンホト市)、一九九一年(東スニト)といった具合であり、また、「一九八五、六年には西ウジュムチンにはほとんど固定家屋は存在しなかった」(西ウジュムチン)、「一九八九年以前、ガチャ(生産隊)の四〇ほどの世帯で、二軒だけ固定家屋があった。その後、年に一〇世帯のペースで固定家屋が建てられ現在ゲル住まいは皆無」(東スニト)というインフォーマントの証言からも裏付けられる。

なお、こうした固定家屋の耐久年数は一般に短く、一九八七年に建てた固定建築物を一九九八年に改築した例(アバガ)、一九八八年に建てた固定建築物を近々予定している息子の結婚を期に改築予定の例(アバガ)など、一〇年程度で改築が行われるようである。この背景には、後で述べるように牧民が比較的裕福であることに加え、施工技術の未熟さが指摘できる。特に、レンガ積みの隙間を大量のモルタルで埋めるため、経年変化により容易に家屋に歪みが生じるが、こうした現象は比較的新しい住居にも見受けられた。

ただし現在、シリングルでは完全にゲル居住

から固定家屋居住へ移行したわけではない。ゲルのみに居住している例は少ないが、固定家屋の脇にゲルを立てて夏の客間としている例や、羊飼いで雇用した牧畜労働者を住まわせている例は珍しくない。また、後で詳述するアバガの北部地域のように各季節の営地が分散している場合、固定家屋の存在する営地（主に春営地）と存在しない営地が発生し、固定家屋の存在しない営地ではゲル居住を行う例もある。さらに、結婚式などの手伝いのため数日間別の場所に寝泊りする場合などにもゲルは活用されている。

ただし、彼らの言葉を借りれば「ゲルは三、四年に一度はフェルトを交換する必要がある、移動しない分には面倒」（西ウジウムチン）なので、恒久的な住居としては利用されなくなつた、ということである。さらに筆者自身の観察や経験に基づいて付け加えるならば、テレビなどの大型耐久消費財を設置する際の利便性や、特に厳寒の冬季における快適性も固定家屋への移行を促した要因として指摘しうる。なお、固定家屋の建築費は一九九〇年代半ばで二万五〇〇〇—三万五千元程度を費やしており、これが単純にゲルのフェルト交換より経済的であるかどうかは今後検討の余地があるろう。

一方のモンゴル国においては、牧民の基本的な住居はゲルである、と論断して差し支えない。ただし、そこで見られるゲルは現在内モンゴルで使われているゲルと全く同一

ではない。まず、モンゴル国で使用されているゲルのほうが一般に大型である。これは単にゲルの直径が大型であるというだけでない。ゲルの大きさはハナ（壁）の枚数で表現されるが、そもそもモンゴル国で使用されているハナのほうが大型である。内モンゴルにおける五ハナのゲルとモンゴル国における四ハナのゲルは、その直径がほぼ同一である。また、内モンゴルで現在使用されているゲルにはバガナ（柱）が存在しないのに対し、モンゴル国のそれは一般的にバガナが必須であり、その結果として天井の高さが高くなっている。そのため、ゲルの容積も内モンゴルのものに比較してはるかに大きい。

こうした差異の生じた経緯について実証的に語りうるだけの資料を筆者は持ち合わせていないが、オンゴンソムで実見した一九五三年製作のものという「ダリガンガ式」ゲルではバガナが存在しないため背が低く、また現在モンゴル国で一般に見られるゲルに比べ天井が小さく採光性が悪いという特徴があった。また、大型のゲルは、床ではなくベッドに寝る現代モンゴル国の牧民の生活スタイルに適応していることも事実である。それゆえ、モンゴル国においてはゲルの居住性向上が内モンゴル以上に追求され、現状に至っていると想像することはあながち荒唐無稽ではないだろう。あるいはこうした差異こそが、モンゴル国のマジョリティであるモンゴル族と中華人民共和国のマイノリ

テイであるモンゴル族が取りうるオプションの違いの一表現形であるともいえよう。

(二) 所有家畜

ここでは、家畜構成および家畜頭数について着目してみたい。まず、シリントールにおける所有家畜の例を表1に示す。これらのデータは、筆者が聞き取り調査を行った世帯のうち、家畜数をほぼ種類別に把握しえた世帯に関するデータであり、No.1～7およびNo.11は一九九九年の数値、No.8～10は二〇〇一年の数値である。

このうち、No.1の世帯では民政局のヒツジ二〇〇頭、No.5の世帯では科学委員会のヒツジ・ヤギ二六〇頭を預託され、放牧することでも収入を得ている。逆にそれ以外の世帯では収入目的に他人の家畜を放牧することはないので、ヒツジ・ヤギ（モンゴル語表現ではヒツジと総称）四〇〇頭というのが生活最低ラインであることが看取しうる。一方、世帯の主人が幹部でフフホト在住であり、富裕者の一典型とも言えるNo.11であってもヒツジ・ヤギは一〇〇〇頭であり、アバガのほかの事例でも一〇〇〇頭に達したのを期に群れの分割を行った例があるなど、ヒツジ・ヤギ一〇〇〇頭がある種の上限値として認識されているようである。ただし、その一方で、シリントールのNo.4のインフォーマントは地元での最富裕者を二〇〇〇頭と表現し、自らを中

表1 シリントールにおける所有家畜の例

No.	地 域	ヒツジ	ヤギ	ウマ	ウシ	ラクダ
1	シリントール	200	20	10	20	0
2	西ウジュムチン	400	10	7	30	0
3	西ウジュムチン	400	200	25	25	0
4	シリントール	合計 700		数頭	50	0
5	東スニト	147	37	合計 30		0
6	東スニト	合計 700		40	140	3
7	東スニト	合計 800		20	30	3
8	アバガ	合計 400		数頭	30	0
9	アバガ	400	120	15	16	0
10	アバガ	合計 700		20	60	3
11	アバガ	合計1000		数頭	100	0

表2 スフバートルにおける所有家畜の例

№	構成世帯数	ヒツジ	ヤギ	ウマ	ウシ	ラクダ
1	2	合計 700		65	115	4
2	2	合計 200		30	10	2
3	1	合計 100		11	7	1
4	4	合計 800		100	140	8
5	5	合計1800		250	310	8
6	2	100	60	40	40	3
7	1	400	300	50	60	5
8	2	1000	300	60	180	10
9	2	200	90	40	80	数頭
10	2	300	100	300	130	2
11	1	900	150	85	40	7

注：事例はすべてオンゴン＝ソム

表3 シリンゴルおよびスフバートルにおける1世帯平均の所有家畜

	ヒツジ・ヤギ	ウマ	ウシ	ラクダ
シリンゴル	566.7	19.6	50.1	0.8
スフバートル	312.5	43.0	46.3	2.3

流と位置づけており、西ウジウムチンの№3も出産シーズンにはヒツジ・ヤギが一〇〇〇頭に達するが、ローカルな文脈では中流であると表現しているなど、比較的草生の良い東部地域ではより多くの家畜所有が可能であることをうかがわせる。

家畜構成の特徴については、モンゴル国の事例との比較においてより実証的な分析が可能となるため後述するが、ラクダの絶対数がゼロに近い点は比較を待つまでもなかるう。シリンゴルにおいて、現在のラクダの使い道は冬季の騎乗用のみである。當地移動や水汲みには車やトラクターが使われ、多くの地域で第一の移動手段がバイクに変化している現状では、ラクダの利用価値が極めて低いことを示しているものと思われる。

一方、スフバートルにおける家畜所有の例は表2のようになる。ただし、こちらの数字は移動や牧畜労働を共同で行う世帯の集合であるホトアイル単位の合計数となっているため、家畜の絶対数の比較においては若干の注意が必要となっている。なお、サンプルは二〇〇一年の調査で家畜数をほぼ種類別に把握

しえたホトアイルに関するデータ一六事例のうち、ランダムに選択した一一事例を示している。

次に両者を比較するために、一世帯の平均値を算出したのが表3である。なお、ここでは「数頭」あるいは「ウシ・ウマ合計三〇頭」という定量化困難なデータは平均値算出の対象外としている。

この表を見る限り、ウシ以外のヒツジ・ヤギ、ウマ、ラクダについて有意な差異が見出せるだろう。まず、ヒツジ・ヤギについてはシリングルのほうが一世帯平均で約一・八倍の頭数を所有している。逆に、ウマについてはスフバートルのほうが約二・二倍、ラクダについては約二・八倍の所有数であり、特にシリングルのウマについては若干数と思われる「数頭」というデータを除外した結果の数値なので、実際にはさらに差異が大きい可能性もある。

こうしたデータの解釈については、後で検討する牧地や家畜の利用という要素も勘案する必要があるが、差し当たりシリングルのほうがより売却益の高い家畜に特化し、スフバートルでは移動機能の高い家畜を多く所有していることが見て取れるだろう。ただし、スフバートルの場合、全家畜合計で二〇〇―三〇〇頭あれば中流の生活は可能、五〇〇頭以上で中の上、一〇〇〇頭以上で富裕者と考えられており、少なくとも住民の主観レベルにおいては「中流」とみなされる相場がシリングルよりも低めに設定されてい

る点には注意が必要である。

(三) 牧地利用のパターン

ここでは牧地利用のパターンを比較考察するが、シリングルにおいて牧地利用を規定しているのは、何にもましてすでに触れた牧地の分配である。そこでまず、以下に具体的な牧地分配の事例をいくつか挙げておくが、牧地の分配方法には旗の下位単位であるソムのレベルでいくつかの方法が存在する。

(1) 世帯ごと均等配分

シリンホト市東部のヤラルト＝ソムでは、一世帯一二〇〇ムー（〇・八km²）で分配した。なお、土地は一塊であり、分配された面積はシリングルのほかの事例と比較して最小レベルである。

(2) 家畜数に応じた分配

アバガ旗南部のデルゲル＝ソムでは、一九八三年に土地が分配された際、家畜数に応じて土地が分配された。ただし、その後一九九〇年に世帯の人口数で再分配が行われ、現状では世帯の人口数に応じた面積となっている。なお、筆者が調査した世帯（調査時点での世帯人員五名）では牧地四〇〇〇―五〇〇〇ムー（約三km²）のほか、別に草刈地が分配されたという。

(3) 世帯人口に応じた分配

これもソムに応じ面積はさまざまで、例えば西ウジウムチン旗西部のジャランソムでは一九八三年に一人一八〇〇ムー（一二km²）、シリント市北部のアラシャンソムでは一九九一年に一人二九〇〇ムー（一九km²）、東スニト旗東部のチャントシルソムでは一九九八年に一人三三〇〇ムー（二二km²）という分配方法を取っている。なお、ジャランソムとチャントシルソムの事例においては土地は一塊であるが、アラシャンソムの事例では冬营地とそれ以外の营地の二塊に分かれており、両者は一〇kmほど離れていた。

また、アバガ旗北部のソムでは季節ごとの营地が別々に分配されている例もあり、ボグドオーラソムでは冬・春夏营地の三箇所合計で一世帯八七〇〇ムー（五・八km²）、さらに北のナランボラグソムでは冬・春・夏营地の三箇所合計で一世帯三万四〇〇〇ムー（二二・八km²）もの牧地を分配されている事例が存在した。なお、こうした分配方法に関しては自然環境というよりはソムごとの恣意的な決定に依存する部分が大きいようで、ボグドオーラソムに隣接する東スニト旗東部のチャントシルソムでは、二本の道で区切られているが、事実上一塊である土地（各七〇〇〇ムー、六〇〇〇ムー、一〇〇〇ムーの合計一万四〇〇〇ムー九・四km²）が分配されている事例を見ている。

こうした牧地の分配については、各世帯主に「草牧場使

用証」「草原所有証」といった契約証が発給されており、上述最後のチャントシルソムの事例においては、双方ともに一九九二年七月一日付けで作成され、「草原所有証」には土地区画の簡単な地図も描かれていた。ただし、この地図は非常にアバウトなもので、土地のごく概略が記されているのみで測量に基づいて作成されたものではないと思われる。なお、現在の牧地の分配期間はボグドオーラソムでは一九九六年から一〇年であったが、今後三〇年に延長されるという噂が牧民の間で囁かれていた。また、チャントシルソムでは、一九九八年に三〇年契約で土地の分配を行っていた。

さて、このように牧地が分配されている状況下で、牧地利用のパターンは分配のスタイルに応じていくつか考えうる。すなわち、牧地が一塊である場合、二塊である場合、それ以上である場合である。まず、牧地が季節ごと別々に存在する場合、その牧地は分配以前にも当該季節に使用されていたものであるようである。筆者の実見したボグドオーラソムの事例において、現在の春营地は分配以前の春营地であり、その他の季節の营地も分配以前からその季節に使用されていた牧地であったという。ちなみに夏营地は春营地からほぼ南六・五kmの距離にあり、冬营地は春营地の北側に存在することであった。牧地が二塊であるのは筆者の実見した限りでは、アラシャンソムの事例のみであっ

たが、その場合冬営地のみが山中の別箇所に存在した。ただし、分配以前の牧地利用との関連は未確認である。

一方、牧地が一塊として分配された場合、放牧は基本的に通年、同じ土地を使用することになる。ただし、同一の家畜囲いからの日帰り放牧が続けると牧地の利用にむらが生じるとの理由で、特に夏場は家畜囲いから離れた場所に家畜を寝泊りさせる「オトル」という方法を採用している事例がアバガで見られた。

また、シリングルにおける牧地利用の特徴として挙げられるのが、冬季における積極的な飼料の利用である。飼料は自らの土地で草を刈る（西ウジウムチン、アバガ）、アバガや東ウジウムチンで取れた干草、あるいは南の農耕地域から運んでくる藁などを購入する（東スニト、アバガ）、自ら飼料用の畑を開墾し豆類などを栽培する（東スニト、アバガ）といった方法が採用されている。具体的な規模としては、干草を購入する場合、小家畜八〇〇頭、大家畜五〇頭の場合で一〇トン（東スニト）、畑で豆類を栽培する場合、小家畜六〇〇頭、ウシ六〇頭程度で約一ヘクタール（東西約一五〇m、南北約七〇m・アバガ）という数字を挙げている。

一方、モンゴル国における牧地利用の最大の特徴は、土地の私有化が行われていないがゆえに牧地選択の自由度が高いという点である。とはいえ、現実の牧民の牧地選択は

完全な意味での自由でもランダムでもない。まず、彼らの日常的な移動範囲は基本的にソムの下位単位であるバグの内部であり、逸脱に対しては政府関係者、特にバグ長による非難・尋問などが予想される。とはいえ、スフバートル県オンゴンソムの場合、各牧民バグの面積は二〇〇〇km²ほどもあり、内モンゴルの状況とは比較にならない広さであることは事実である。

だが、オフィシャルな規制要因はさらに存在する。冬营地、春营地については多くの場合、家畜囲いなどの私物である固定施設が付属するために、その場所はソム政府による認可制となっている。つまり、冬营地と春营地は、雪害などの緊急事態を除き毎年一定の場所を利用することが期待されており、また牧民の側も利便性を考慮すればあえて別の場所に营地を構える必要性も感じていないというのが現状である。

一方、夏营地と秋营地については申告制となっている。そのため、より自由な変更が理論上は可能となっているのだが、筆者自身の調査データを見る限り、多くの事例ではほぼ一定の選択範囲の中から選んでいる。なお、ゲルを立てる場所は前年と全く同一箇所ということはなく、最低でも五〇〇mは離すというが、その程度では彼ら自身「同じ場所」と認識している。

さらに、モンゴル国における牧地利用の特徴的形態が、

秋季におけるオトルである。これは家畜に越冬可能な体力

を付けさせるために新鮮な草を大量に食べさせることを目的として行われ、およそ八月下旬より一一一二月の冬営地に入るまでの間、二、三週間程度で営地移動を繰り返し、結果として畜群の利用可能な牧地面積を増大させる効果を持たせる、というものである。いかに土地が広大であっても、ヒツジ・ヤギの日帰り放牧で利用可能な牧地面積は⁽⁵⁾おのずと限界がある。仮に営地から半径二kmの円を利用可能な範囲とすると、一営地あたり約一二km²となる。単純に年四回の営地変更でも単純計算で四八km²となり、さらにオトルで三回営地を変更するとなれば八四km²の牧地を利用していることになる。もとより、オトルはすべてのホトアイルが行うわけでもなく、また季節移動の回数も少ない事例では年二回である。さらに、スフバートルではホトアイル単位で移動しているため、世帯あたり面積に換算すれば計算上二分の一から五分の一となる。しかし、こうした事情を勘案しても、彼らはシリングルでは最も広い牧地を分配された牧民と匹敵するほどの広大な牧地を利用している実態が明らかにになる。

(四) 牧畜用インフラ

ここでは、牧畜に関わるインフラ、具体的には牧地の囲い(内モンゴルのみ現象)、井戸、家畜囲いについて言及

したい。

現在内モンゴルとモンゴル国の牧畜地域を比較した場合、住居と並んで顕著な景観上の違いが、内モンゴルのみに見られる、牧地を囲う有刺鉄線のフェンスである。こうしたフェンスは牧地の分配以後に草を保護するため、つまり他人の家畜の侵入を許さず、かつ自らの家畜も然るべき時期以外には侵入させないための目的で設置されたものであるが、シリングルにおいては特に一九九〇年代に行われた第二期目の分配契約以後に出現する現象のようである。

例えば、東スニトのあるインフオーマントは「土地は一九八四、五年に一応分けることになったのだが、一九九八年に『本当に』分配したので、自らが分配を受けた一万六五〇〇ムーのうち、差し当たり一万ムー囲った」と述べていた。またアバガのインフオーマントの例では筆者が一九九六年夏に訪問した際には囲いが存在しなかったが、二〇〇一年に再訪した際には牧地がすべて囲われており、この囲い込み現象が一九九〇年代末のものであることを示唆している。

なお、西ウジウムチンのインフオーマントによれば、約一万ムーの牧地を囲うのに一〇万円を費やしたそうであり、囲いのほうが時期的に後であるとはいえ、同一人物が一九九〇年代前半に固定家屋を建てた際の費用が三万円であったと述べているのと比較すると、いかに高価であるか想像

に難くない。なお、上述の東スニットのインフォーマントによると同様の広さの牧地を囲うのに六万円かかったと述べているので、条件などにより価格は大幅に変化するようだが、それでも固定家屋よりはるかに高価なことは間違いない。そのため、囲いは上述の事例のように牧地の部分ごとに少しずつ設置、あるいは親兄弟数世帯の牧地をまとめて囲うなどの方策もしばしば採られている。なお、季節ごとの牧地が分かれている場合、当然ながらすべての牧地が囲い込みの対象となる。

さらに、シリngoルの牧民調査を行っている際にしばしば話題に挙がるものとして井戸がある。ただし、これには地域差があり、草生が比較的良好で地下水位も高い西ウジュムチンやシリンホト市あたりでは、共用の井戸は何かと面倒なので自分たちの井戸が欲しいという程度の動機で、費用も三〇〇〇—四〇〇〇円で手動式の浅井戸が掘れるという話なのだが、飼料栽培を行い地下水位の低い東スニトやアバガ北部では、各世帯が一つ以上の発動機ポンプを使った井戸を掘っているのは常態であり、発動機ポンプを使つた一〇〇mの深井戸に七、八万円費やした(東スニト)、一〇万円かけて電気ポンプを使つた一〇〇mの深井戸が欲しい(アバガ)、という話が現実味を帯びて語られている。なお、個人の井戸に関しては政府の管理を受けている。筆者は東スニトで一九九六年五月二九日付の「(国)取水許可

証」という名前のついた書類を実見しており、そこには一年更新である旨が記載されていた。

家畜を収容する家畜囲いは、シリngoルではほぼ全世帯に存在する。大きさは家畜頭数により多少の変動はあるものの、東西三〇m、南北一五m程度、堀の高さ一・五m弱のレンガ造りで、北側三分の一程度に屋根がしつらえてあり、内部は東西方向に三分され、中央部分が飼料貯蔵場所となっているものが一般的である。なお、現有の家畜囲いに関して建設年代を二人のインフォーマントに尋ねたが、一九九一年(シリンホト)、一九九六年(西ウジュムチン)との答えであり、ほぼ固定家屋と前後して建設されているようである。

一方、モンゴル国においては、社会主義時代に掘られた発動機ポンプを使つた井戸が一九九〇年代に入りメンテナンス不足などで急速に利用不可能となり、それが利用可能な牧地面積を狭めるとして問題視されているのが現状である。筆者の調査ソムでもかつて数箇所存在した上述のような井戸はすべて利用不能となつていた。また、手動式の井戸についても社会主義時代と比較して減少こそしていないものの、井戸の私有が認められていないこともあり、筆者の知る唯一の新規掘削はインフォーマントが自らの春営地のすぐ脇に掘つたものであった。

家畜囲いに関しては、一般に出産シーズンの営地である

春営地に、社会主義時代に作られ、一九九〇年代に私有化されたものが各ホトアイルに一つ存在する。筆者の調査地では材質は石積みで、サイズはシリングルのものより若干小さく、木製の屋根が北側三分の一ほどにかけてある。調査当時、干草の利用はほとんどなかったが、 $1\text{m} \times 1\text{m} \times 20\text{cm}$ ほどの干草の塊（価格は一塊七〇〇—八〇〇トウグルク）を二、三購入し、家畜囲いの屋根の上に置いていた事例も存在した。一方、冬営地には屋根なしの家畜囲いが存在する場合もあるが、夏営地・秋営地に至っては固定的な家畜囲いが建設されることはなく、必要に応じて高さ一米強の板で直径一五mほどの円形の囲いを作るのみである。

（五） 牧畜労働の組織方法

牧畜労働の組織方法についても、内モンゴルとモンゴル国では顕著な違いが見出せるが、これは牧地のあり方の違い、および所有家畜頭数に由来するものである。

まず、内モンゴルについてであるが、こちらでも一九八〇年代まではホトアイルを構成して移動生活を送っていた。そして、その後世帯単位の個別放牧に移行したという認識では各インフォーマントが一致するが、ホトアイル解体の原因に関する言及としては家畜頭数の増加と牧地分配の二種類が存在する。すなわち「この近辺では家畜頭数が多いためホトアイルは存在しない」（シリント）、「一九八六、

七年に土地を分けたばかりのころは親族でホトアイルを構成していたが、今は家畜が増えたので世帯ごとで別々に放牧している」（アバガ）が前者に属し、「以前は二、三世帯でホトアイルを構成し移動生活をしていたが、一九八八年に固定家屋を建てて別々になった」（東スニト）が後者に属する言説である。ただし、最後の事例でもそれと前後して「ガチャの家畜は一九八〇年代には一万数千頭だったが、現在は七万頭に増加した」と述べており、家畜の増加も事実として存在している。

さて、家畜頭数が増加し、さらに牧地の分配などでホトアイルが構成できなくなつた場合、家族労働のみという絶対的な労働力不足をいかに解消しうるであろうか。近隣に家畜頭数が少なく労働力の多い世帯が存在するならば、彼らと一緒に放牧すれば効率的であり、まさにこれがホトアイル形成の論理なのであるが、そもそも家畜頭数の増加がホトアイル解体の原因である以上、こうした方法は採りえない。そこで一般的に行われているのが、貧しい他地域から単身の、あるいは世帯ごと牧畜労働者を招き、彼らに放牧をさせるという方法である。例えば、西ウジウムチン旗ジャランソムに属するザガスタイガチャにおいては、四〇世帯あまりの住民のうち一〇世帯ほどが牧畜労働者の世帯である点からも、牧畜労働者の雇用が広く行われていることが理解できる。むろん、これに加えて単身で来訪し

ている牧畜労働者が存在するわけである。

牧畜労働者の出身地については、まれに現地の貧困者を雇用する事例もあるが、多くはチャハル(例…正藍旗)、赤峰(例…バリーン左翼旗)、ウランチャブ(例…四子王旗)など、調査地より南の比較的貧しい地域の出身者である。

彼らの雇用に当たっては紹介業者のような者はいないため、人づてに雇用することになる。そのため、ある地域に特定の地方出身の牧畜労働者が偏在することが多いようである。なお牧畜労働者の民族籍は、筆者の実見した範囲では一例のみ漢族が存在した以外、すべてモンゴル族であった。彼らの雇用期間はさまざまであるが、長い者はすでに三年同じ場所で働いている事例(アバガ)から、短い者では半月前から雇用している事例(アバガ)までである。

彼らは一般に雇用者のゲルや固定家屋の一部屋などを提供されて居住している。また家畜もほとんど連れてきておらず、場合によっては布団のみ持参してきた(西ウジウムチン)、という状況である。給与は雇用条件によってさまざまであるが、一例としては月に二〇〇元と仔ヒツジ一頭(西ウジウムチン、世帯来住者、一九九九年)、月三〇〇元(シリント、世帯来住者、一九九九年)、月三五〇元で食事つき(アバガ、単身者、二〇〇一年)となっている。

一方、モンゴル国においては、牧畜労働の組織方法は現在なおホトアイルの構成が一般的となっている。ホトアイ

ルは数世帯から構成され、そのうち長老格の男性が牧畜全般の指示を出し、牧畜労働は各世帯の成員により輪番で行うのが一般的な分業のあり方である。なお、ホトアイル構成世帯は必ずしも親族や姻族でなくてはならないという規範は存在しないものの、例えば筆者が一九九八年にスフバートルで行ったホトアイル構成世帯の世帯主と長老格の男性との関係に関する調査では、全三〇例中親族が二一例、姻族が九例を占めており、基本的に親族・姻族からホトアイルが構成されていることが看取しうる。なお、その後の調査においてもホトアイルに完全な他人が含まれる事例は一七ホトアイル中一例(一九九九年)、一六ホトアイル中二例(二〇〇一年)と、ごく少数である。

さて、スフバートルでもシリントと同様、ヒツジ・ヤギの群れは一群一〇〇〇頭が限界であり、それを超えると群れを分割する必要があると考えられている。つまり、ヒツジ・ヤギが一〇〇〇頭を超えたホトアイルでは、シリントのようにホトアイルを分割するほうが合理的な判断と思われるのだが、スフバートルでは必ずしもそうした方法は採用されていない。むしろ、畜群のみを分割し、ホトアイル全体の牧畜労働の指揮については依然として長老格の男性に委ねられるケースが頻繁に見られる。例えば、世帯数・家畜数ともに最大規模の部類に属するあるホトアイル(表2のNo.5)では、長老格の男性・息子二人・婿二人の五

世帯で一八〇〇頭（二〇〇一年当時）のヒツジ・ヤギを放牧していたが、冬季以外は群れを母子群と不妊・オス群に完全に分割しており、春季は前者（約一〇〇〇頭）のみが春営地を使用し、後者（約八〇〇頭）は冬営地に残留、そのまま夏季も別の場所に夏営地を構え、秋のオトルを経て冬季に冬営地で合流するという放牧パターンであった。また、ここまで複雑な放牧パターンを取らない事例でも、ほぼ一〇〇〇頭を超えるホトアイルでは、何らかの季節に群れの分割を行っているのが普通である。

こうした、スフパートルのホトアイルがシリングルとは異なり拡大を続ける現象の背景には、以下のような要因があると推測される。

(1) 家畜の圧倒的多数を長老格の男性が所有している。

先に具体的な数字を挙げたホトアイルの場合、婿二人の所有している家畜はそれぞれ一〇〇頭程度である。また、息子の所有家畜に関しては、その名目上の所有者が息子であつても、息子が自由に処分できないことは往々にしてあるという。つまり、ホトアイルに存在する大半の家畜の処分権を長老格の男性が掌握している。

(2) 家畜囲いなどの施設も長老格の男性の所有物である。

家畜囲いを新たに建設するには相応のコストが必要であると思われるが、そうした経済的能力を有しうる長老格の男性はすでに家畜囲いを所有している。

(3) 長老格の男性の放牧技術が優れている。

多数の家畜を擁する事実が、放牧技術の巧拙に左右される要素の大きい牧畜においてはその人物の放牧技術の優秀性を証明していると考えられている。そのため、可能であればそうした優秀な人物のホトアイルに所属するほうが特に家畜の少ない者にとつては有利である。

(4) 土地利用に関するコストはゼロである。

そもそも、牧地の草生量と家畜の食草量との関係により一群のサイズの上限は決定されるが、スフパートルにおいては牧地が分配されていないのでどれだけの広さの牧地を使おうと自由である。また、例えばオンゴン・ソムにおける牧民の人口密度は一kmあたり約〇・三人であり、人口密度も低い。そのため、畜群を二分し、二倍の牧地を利用するという選択肢はコスト的にも引き合い、さらに他の牧民との紛糾を引き起こす恐れも少ない。

なお、スフパートルにも牧畜労働者の雇用が全く存在しないというわけではない。筆者が二〇〇一年に実見した唯一の事例では、ヒツジ・ヤギ一九〇〇頭ほどを擁する大規模なホトアイル（五世帯）で、そのうち一世帯が牧畜労働者であつた。労働者はもともとソム中心地に居住していた無職の二〇代の青年で、父母を亡くした孤児であつた。彼は働き者だったので、長老格の男性が頼んで二〇〇一年五月よりホトアイルに加わらせたという。ゲルとメスウシ一

頭のみが労働者の持参物で、長老格の男性がヤギ二〇頭、ヒツジ二〇頭を与えたほか、メスウシ五頭を自由に搾乳させ、またウマも自由に使わせていた。さらに月給五万トウグルク（当時の相場で約四〇〇元）に加え、小麦・米・茶なども必要に応じて与えていた。ただし、こうした事例自体が稀なので、これをシリngoルの牧畜労働者の状況と比較するのは一般性の面から見て問題があると思われる。

（六）家畜預託、土地の賃借

さて、牧畜労働力と家畜数の不均衡は、モンゴル牧民の場合、単に牧畜労働の組織方法によってのみ解決されているわけではない。現有の家畜に応じて労働力を組織する解決が前節で論じた方法であるが、家畜は本質的に動産である。農民の生産手段である土地などとは異なり、自ら移動能力と持つという点を考慮すれば、家畜というリソースの周辺に労働力を配置するという解決方法とは別に、現有の労働力に応じて家畜を再配置するという方法もまた解決方法の一つとなりうる。すなわち、家畜預託である。

シリngoルでは、三種類の家畜預託のパターンが存在する。第一が、すでに所有家畜の項で簡単に触れた民政局や科学委員会などの政府機関が所有する家畜を牧民に委託する例である。第二に、早魃のひどい西スニトに住む弟のヒツジ一四〇頭を受託した例（アバガ）や、日常的には利用

しないウマ数頭を近隣の友人に委託した例（シリngoホト）である。そして第三が、東スニトで一例見出したのみであるが、ヒツジやウシを群れごと、近隣の牧民に放牧を委託し、なおかつ牧地も受託側の牧民のものを利用する例である。

なお、第二のパターンと第三のパターンの違いは、前者は受託側の方が多くの家畜を持つっており、委託者の家畜を受託者の畜群に合流させる形を取るが、後者は委託者の方が多くの家畜を持つっており、受託者の家畜は委託者の畜群に混ざって放牧されるという経済的立場の違いである。しかも第三のパターンでは第一のパターンと異なり、委託側も土地を持つ牧民であるにもかかわらず、自らの土地ではない場所であらせるといふ特徴がある。なお、委託側と受託側の立場の違いを反映して、第一と第三のパターンにおいては受託側に明確に規定された報酬が渡されている。

具体的な報酬額については、第一のパターンの例で夏場のみシリngoホト市民政局の羊群二〇〇頭を受託する場合、毎月六〇〇—八〇〇元くらいの給料を得るほか、冬場に石炭の供給を受けている。第三のパターンの例では、インフオーマントの場合は仲の良い知人にウシ一四〇頭を委託して月四〇〇元だったが、高いと七〇〇—八〇〇元という契約も存在するとのことであった。

さらに第三のパターンのバリエーションとして、他人の

土地を借りてそこへ自分の畜群をオトルに出し、牧畜労働者に放牧させることもある。これはアバガで見聞した事例であるが、二〇〇一年は旱魃がひどかったので、あるインフォーマントは聞き取り調査の五日後より南方にある仲の良い知人の土地（三〇〇〇ムー＝二km）にヒツジをオトルに出し、そこでは牧畜労働者がゲルを持っていつて放牧する予定であった。なお、対価として一か月一群あたり六〇〇元を支払う契約との説明であった。

一方、モンゴル国においては他人の土地を借りて放牧する、あるいは放牧してもらうという経済関係は土地制度上存在し得ない。無論、上述の第三のパターンに近い形態として多数の家畜を所有する牧民が畜群ごと他の牧民へ委託することは理論的には想起可能であるが、現在のスフバートルにおいてこうした事例を見出すことはなかった。第一のパターンとしては国境警備隊の家畜が駐屯地から七〇―八〇km離れた場所に預託へ出されているという例を聞いたことはあるが、実見した事例ではない。

第二のパターンは、ソム中心地などの定住集落に居住している人物が、自らの所有家畜を親戚の牧民などへ放牧を委託するという例がしばしば見受けられる。例えば前節で取り上げたヒツジ・ヤギ一八〇〇頭を擁するホトアイル（表2のNo.5）の場合、定住している親戚数名から受託した家畜が合計一四〇―一五〇頭存在することであった。家

畜の種類はヒツジ・ヤギのほかウシとウマもあり、牧畜技術が高いと目されている人物のところに選択的に委託されるという。

(七) 家畜の利用・売却

モンゴルの牧畜は、少なくとも現状に関する限り、決して自給的な生業とはいえない。つまり、自らの飼養する家畜から自らの必要とする物資すべてを作り出しているわけではなく、交易を通じて別の形に変換し、それによって生活を作り立たせているのである。そこで本節では、牧民が家畜をいかに直接的および間接的に利用しているかを検討する。具体的には、直接的利用として肉・乳・毛の利用および移動・輸送手段としての使用、間接的利用として生体家畜・毛などの売却を取り上げる。

シリングルにおいては、家畜の直接的利用は限定的なものである。まず、ウマやラクダへの騎乗であるが、これは自動車やバイクの普及とともに急速に廃れている。特にバイクはほぼ各世帯に最低一台は存在する状況である。ウマの騎乗は家畜放牧の際や降雪時の近距離移動には利用されているが、家畜放牧においてもバイクや自転車を利用する例も稀ではない。ラクダにいたってはすでに見たように、東スニトやアバガなど、比較的乾燥した地域に冬季の騎乗用に若干数が残るのみである。

一方、乳利用についてもあまり積極的ではない。現在の搾乳対象はウシのみであり、草生の良好な年には搾乳を行ない乳茶に入れるほか、クリーム（ウルム）、酸乳（ツアガー）など二、三種類の乳製品を作るが、例えばアバガなどでは早魃の年には搾乳をせず、春営地に残置しておき茶には店で購入した粉乳を入れ、接客時に出す硬質チーズなどの乳製品も購入したものを使用している。こうなると、ウシの直接の利用も肉用に限定されてくる。

ヒツジ・ヤギの肉用としての利用は依然として盛んに行われている。それに対し毛は、すでにゲルに居住するわけでもないので直接利用の方途もほとんどない。カシミアに関しては単価が高いため、彼らの収入に関する話題で取り上げられることもあるが、羊毛については単価が安く、売却していないわけではないと思われるが、彼らの考える収入源の一つとして見なされてすらいなのが現状である。なお、カシミアは一九九九年春季の西ウジウムチンにおける価格で三六〇元/kgであった。ただし、一頭のヤギから取れる量は四〇〇g程度なので、実際の収入としてはヤギを一〇〇頭程度所有していなければあまり大きなウエイトを占めるものではない。

さて、次に売却の話へ移ろう。シリングルにおける主たる売却対象はヒツジ・ヤギ・ウシの生体とカシミアである。売却価格は生体当たりの平均としては三歳ヒツジで三〇〇

元、ウシで一〇〇〇元程度になるというが、実際には一斤（五〇〇g）あたりの相場が存在する。例えば一九九九年秋季の東スニト草原部における相場では仔ヒツジ（ホルガ）、仔ヤギ（イシグ）二・六元/斤、といった具合である。ただし、実際の取引現場で計量することはなく、大きさを見ておおよその重量を推測し、大きめの仔ヒツジ・仔ヤギなら一〇〇元程度という値付けで取引がなされている。ヒツジ・ヤギの場合、主な売却対象は仔畜、オス、老畜である。なおウマに関しては重量あたりの取引相場は存在せず、程度の良いウマで一頭一三〇〇元程度であるという（シリンホト）。

シリングルでは秋になれば、都市部から買い付け人のトラックが牧民宅を頻繁に訪れ、ウシ一六頭を二万元の即金で取引する、というような光景が普通に見られる（東スニト）。買い付け人はトラック、出資者、運転手、草原に知り合いのいる案内人が一組を構成しており、価格の安い草原部で仕入れた家畜を都市部で転売し利益を得ている。シリングルの場合、彼らの転売先は集寧、張家口という近隣の都市から遠くは北京、天津にまで及ぶ。なお、家畜売却は家畜が最も太り、また越冬前に家畜を売却したいと牧民が考えている秋季が最も盛んであるが、他の季節にも売却されることもある。

また、具体的な売却数であるが、東スニトのヒツジ・ヤ

ギを八〇〇頭ほど所有する牧民の事例(表1のNo.7)で年間二〇〇一三〇〇頭を売却することであった。なお、年収については一九九九年、シリント市のヒツジ・ヤギ七〇〇頭、ウシ五〇頭を所有する牧民(表1のNo.4)で三、四万元とのことであった。

さて、一方のスフバートルにおける状況であるが、シリントと比較して家畜の直接的利用は広範にわたる。まず、ウマやラクダへの騎乗については、彼らも長距離となればバイクや自動車の利用を考えるが、そもそも自動車やバイクが各世帯に存在するわけではないので、まずそこへのアクセスにウマやラクダを使う必要がある。また、二〇一三〇km程度の距離であれば、移動手段としてウマを選択することは稀ではない。

乳利用についても、最低でもウシはすべての牧民世帯が常に搾乳しており、乳茶へ粉乳を入れることはそもそも粉乳が売られておらず想像不可能である。また、作られる乳製品のバリエーションも、牛乳酒(シミンアルヒ)やバター(シャルトス)など、バリエーションが豊富である。さらに夏場であれば一部の世帯はヒツジの搾乳も行い、そこから乳製品をつくり、ウマも搾乳して馬乳酒(アイラグ)を製造する。そしてこれらは商品たりうるとは考えられておらず、自家消費もしくは定住地域に住む親戚や友人へ贈与され、そこで消費される。具体的な計量に基づいた

論断ではないが、乳製品が食生活に占めるウエイトはスフバートルにおける方が明らかに大きい。もとよりスフバートルの牧民世帯においても肉を外部から購入することはないので、スフバートルの方が食料の自給率が高いといえるだろう。なお、シリントでは外部から購入してくる野菜が牧民の食生活にも一定のウエイトを占めていたのに対し、スフバートルの牧民の食生活では野菜の消費はゼロに近く、野菜を購入することも困難である。

毛に関しては、スフバートルではフェルトの外被を持つゲルに居住しているが、毎年フェルトを作るわけではない。そのため、自家使用する年を除き、取れた毛はすべて売ることになる。売却対象は、ヒツジ・ヤギ・ラクダの毛であり、一九九八年現在のオンゴンソムにおける価格は表4の通りであった。

なお、モンゴル国においても売却場所による価格差は存在し、例えば一九九七年現在、カシミアの価格はオンゴンソムでは九〇〇〇一萬トウグルク/kgであったが、県中心地では一萬二〇〇〇トウグルク/kg、首都ウランバートルでは一萬五〇〇〇トウグルク/kgであったという。ただし、裕福な牧民以外は車を持っておらず、車をチャーターするための現金も持ち合わせていないため、直線距離で五五〇km離れているウランバートルはもとより、一〇〇km以上離れた県中心地へ持ち込んで売却するのも困難である。

表4 獣毛価格一覧表（オンゴン＝ソム、1998年）

家畜の種類	売却時期	価格(トゥグルク/kg)
ヒツジ	6～7月	150
ラクダ	6月	オス500、メス800～1,000
ヤギ(カシミア)	4月	10,000

注：1998年当時の為替相場は1元≒100トゥグルクであった

表5 家畜取引価格一覧表（オンゴン＝ソム、1998年）

家畜の種類	価格(トゥグルク/頭)	備 考
ヒツジ	オス2.5～3万、メス1.5～2万	
ヤギ	オス1.5万、メス1.3万	
ウマ	5万	駿馬は1千万の値がつく場合もある
ウシ	オス15万、不妊メス10～12万	
ラクダ	16～20万	年齢により異なる

そこで売却相手は、輸送手段を持つ裕福な牧民を除けば、トラックに乗ってソムに出入りする商人ということになる。こうした商人の中にはもちろん、家畜の生体買い付けを行う者もいる。一九九八年現在のオンゴン＝ソムにおける価格を表5に示すが、スフパートルにおいては家畜の価格は最初から一頭当たりの価格で相場が存在している。

基本的な家畜・畜産品売却カレンダーはシリングルと大差ない。家畜が太る秋季（一〇―十一月）に主に家畜を売り、オスや不妊メスは衰弱が少ないので春季にも売却することがある。また、カシミアは春季、羊毛は夏季に売却する。ただし、彼らの売却行動で特徴的なのは、彼らの主観としては一定の現金収入を確保するためではなく、あくまでも当面の物品購入の必要に応じて売却しているという点である。例えば、二〇〇〇年にソムへ来た商人からソーラー発電機とテレビ受像機のセットを三五万トゥグルクで購入した際、去勢オスヒツジ二頭を売却し、その利益を支払いに充てた（表2のNo.11）という具合である。

もちろん、家族の人数が一定ならば小麦粉や茶といった生活必需品の消費量は年間を通じて大規模な変動をきたすことはないと思われる。例えば、夫婦子供七人の世帯の事例（表2のNo.7）で、基本的食料品の消費量として小麦粉五〇kg/月、磚茶一塊/月というデータを得ている。ただし、多くの世帯では消費量の質問に対し「必要に応じて買

うので不明」という返答が戻ってくるのが普通である。

また、家畜生体の売却数についても同様の答えしか得られないことが多い。ただし、息子と二世帯でホトアイルを構成し、小家畜六〇〇頭、大家畜八五頭を擁するホトアイルの長老格の男性によれば、その年の出生数にもよるが、一年で二〇〇頭ほどの家畜を売ることであった。

(八) 情報へのアクセス

内モンゴルとモンゴル国の牧民生活においてもう一点、大きな違いを指摘するとすれば、それは情報へのアクセスである。具体的にはテレビや電話であり、情報系の家電と総称することが可能であろう。そして両者を分ける最大の違いが、そうした家電の利用を可能とする電力の有無である。

電力線の設置されていないシリントルの牧畜地域においては、牧畜労働者などを例外とすれば発電装置を持たない世帯は皆無である。かつては風力発電機と鉛蓄電池の組み合わせが一般的であったが、発電量が小さくカラーテレビが使えないなどの理由で、ソーラー発電機が普及しつつある。こうして得た電力の主な用途は二つであり、一つは電灯、もう一つはVCDなどのビデオ機器も含めたテレビの視聴である。白黒・カラーなどの種類を問わなければ、現在テレビを持たない世帯は皆無と言ってよい。

一般に地上波のテレビ放送が受信不可能な牧畜地域においては、パラボラアンテナを立てて衛星放送を受信するのが一般的である。ただし、アンテナの向きによってはモンゴル国など外国の放送も視聴可能となるため、アンテナの設置後にはアンテナの向きが「正しい」かどうかの検査に三〇〇元かかる、とのことであった。

なお、電話については牧畜地域でも使用可能な無線電話が存在し、シリントルにおいては二〇〇一年夏季にアバガ旗で一事例のみ見かけたが、二〇〇二年春季に筆者が内モンゴル西部のアラシャン盟エチナ旗で行った調査の際には二世帯に設置されており、今後普及していくのではないかと思われる。

一方、スフバートルにおいて発電装置を購入することは、ようやく一般的になり始めた段階である。もともと裕福な世帯の中には一九九七年当時からガソリン発電機を所有する者が例外的に存在したが、用途は電灯に限られていた。上述したようなソーラー発電機とのセットでテレビ視聴を行う牧民世帯が出現したのは二〇〇〇年以降である。ただし購入層は裕福なホトアイルの長老格の世帯のみであり、普及率も低く二〇〇一年夏の段階で一六ホトアイル中三ホトアイルに存在するだけであった。なお、スフバートルの牧民もパラボラアンテナを用いて衛星放送を受信しているが、皆モンゴル国の放送を視聴しているとのことであった。

また、電話に関してはソム中心地で有線のものが政府機関などにのみ設置されているのが現状である。

ところで、なぜテレビの普及など情報へのアクセスの差が単に生活の快適さの問題に過ぎず、牧畜にも影響するのかを示すために、最後に以下のエピソードをあげておく。

二〇〇〇年二月三日から二〇〇一年一日一日にかけて、スフバートルからシリソールの一帯にかけて強風を伴う吹雪となった。スフバートル側で最も被害が大きかったホトアイルでは、ウシが強風にあおられ、国境を越えて行方不明になったものや死亡したものを含めて三七〇頭中六〇一七〇頭を失った。このホトアイルの冬営地は国境から約三〇kmと比較的国境の近くに存在したことに加え、事前に吹雪の情報を知らなかった。一方、国境を挟んだアバガの牧民は衛星放送でテレビの天気予報を見ていたので吹雪を予測可能であり、家畜を囲いの外に出さないなどの準備を行ったため、被害は軽微であったという。

無論、ここでは単にテレビを見ることだけでなく、適切な天気予報が出されることや放牧に出さなくても十分な飼料の備蓄があるかどうかも問題となりうる。つまりこれをより広い意味で、南北モンゴルにおける生業のあり方の相違を示している一事例と解釈することも可能であろう。

おわりに——内モンゴル牧畜の現在——

本論の最後に、これまで詳細に比較してきた内モンゴルとモンゴル国の牧畜における断絶と連続を踏まえ、内モンゴル牧民が行っている牧畜の特質についてまとめてみたい。

まず指摘できることは、内モンゴルの牧畜は望むと望まざるとにかかわらず、土地集約的に行われているという点である。すでに論じたように、内モンゴルの牧民は世帯あたりの家畜頭数が多いにもかかわらず、世帯に分配された牧地面積はモンゴル国の牧民世帯が利用しうる牧地面積に比べ圧倒的に狭小である。この原因は直接的には牧地が分配されたという事実にあるのだが、さらに突き詰めれば人口密度の問題に行き着く。

モンゴル国側のオンゴンソムの牧民の人口密度が一kmあたり約〇・三人であることはすでに述べたが、それに対して一九九〇年代初頭の西ウジュムチン旗とアバガ旗における非都市部の人口密度を文献資料より算出すると、それぞれ二・二〇人、〇・九二人となる（内蒙古自治区測繪局総合隊一九九三・二七、二六四）。この人口密度の差が、牧地の囲い込みを引き起こしているのだと理解しうるだろう。さらに人口密度の違いを引き起こした要因を追及すれば、モンゴル国側ではウランバートルへの人口流出による社会

的減少が見られるのに対し、内モンゴル側では逆に人口流入による社会的増加が存在した点が考えられるが、本論の主題から外れるのでここでは可能性を示唆するにとどめた。

ただし、内モンゴルは牧地が分割されており、牧民が牧地を開いて、家畜飼いの傍に建てた固定家屋に居住しているからという理由のみで内モンゴルの牧畜を固定的と理解するのはやや短絡的であると思われる。特に季節別に複数箇所をの牧地を分配されている事例においては、畜群の移動に関してはモンゴル国におけるものと類似している。モンゴル国であつても冬・春营地は一定の場所に認可を受けており、また夏・秋营地も年々ランダムな場所を選択しているわけではない。オトルも、支払能力さえあればという条件付ではあるが、内モンゴルでも土地の賃借や家畜預託によつてほぼ同様の行為が可能である。もとより、モンゴル国においても、移動手段を持たない貧者は季節移動もままならないという事実は存在する。少なくとも、ヒツジ・ヤギを殖やしたい、太らせたいというレベルの牧畜において、両地域の牧民が選択する方法はその見かけ以上には類似しているといえよう。

さらに内モンゴルにおけるホトアイルの解体が単に牧地の分配だけの原因とするのではなく、家畜頭数の増加も一要因であつたことを想起すれば、内モンゴルの牧畜はそ

の点において成功してきたのだ、ともいえよう。もちろん、モンゴル国においては有能な牧民が指導するホトアイルに家畜を集中させることで家畜増加を図る、という内モンゴルとは異なつた経営戦略が採られているが、これは異なつた社会環境（具体的には土地制度）に対する適応方法の違いとして理解すべき事項であらう。

一方、家畜構成を見れば一目瞭然であるように、内モンゴルではウマ・ラクダといった移動に関わる家畜は明らかに少ない。これは住居の移動が減少ないし消滅したことと関連付けても理解可能であるが、むしろ従来の移動手段以上の能力を持つバイクや自動車に取つて代わられた点が大きいであろうことは、牧民が皆バイクや自動車を所有し、何かにつけてそれらを利用して出かけているという事実からうかがい知ることができる。だが、結果として内モンゴルの牧畜がヒツジ・ヤギという「金になる」家畜により重点を置いたものになつている点は、ウシの使われ方において自給的な搾乳は控える、あるいは自家消費用に作る乳製品の種類が少なくても、売却を控えることはないという事実からも裏付けられよう。内モンゴルの牧畜はその意味で経済、より正確には市場経済へのコミットメントの大きい牧畜であるといえよう。ただし、モンゴル国における牧畜の現状は一九九〇年代初頭の社会主義崩壊の結果であり、単にモンゴル国と内モンゴルを「伝統的／近代的」という

範疇で理解すべきではないことを付記しておきたい。

それでは、内モンゴルにおける牧畜は実際にモンゴル国よりも大きな収益を上げているだろうか。かなり大雑把な試算ではあるが、内モンゴルについては本論で挙げた「ヒツジ・ヤギを八〇〇頭ほど所有する牧民で年間二〇〇—三〇〇頭を売却」という例から単純な比例計算をすると、平均値である「ヒツジ・ヤギ五六・七頭」では年間一四二—二一三頭を売却、これをすべてヒツジとみなし、売却単価を三歳ヒツジと仔ヒツジの価格を平均した二〇〇元／頭とすればヒツジ・ヤギで一世帯あたり二万八四〇〇—四万二六〇〇元の収入となる。

一方、モンゴル国については「小家畜六〇〇頭、大家畜八五頭を擁するホトアイルで年間二〇〇頭ほどの家畜を売る」という例から単純な比例計算を行い、平均値の「ヒツジ・ヤギ三二・一五頭」では年間一〇四頭を売却、これをすべてヒツジとみなし、売却単価をオスヒツジとメスヒツジの価格を平均した二万二五〇〇トウグルク／頭とすれば、一世帯あたり二三万トウグルク、一九九八年当時の為替相場換算でおよそ二万三四〇〇元の収入となる。つまり、内モンゴル牧民のほうが単純比較で世帯あたり一・二—一・八倍の収入を得ていることになる。細かい数字に大きな意味はないが、少なくとも内モンゴルの方が有意に高収入であるとは言えるだろう。

だが、その反面、内モンゴルの牧畜は支出も多い。モンゴル国では支出されない牧地の囲い、ポンプ式の井戸、大量の越冬用飼料に加え、牧畜労働者の賃金、自動車やバイク、あるいはテレビ購入などにもその普及率の差を考えれば、モンゴル国とは比較にならないほど多くの支出が伴っていることは明らかである。内モンゴルの牧畜は、高収入である一方で、高支出である。

ところで、この高支出の意味を、モンゴル国との比較においてもう少し考えてみよう。モンゴル国では、ほとんどの工業製品が外国からの輸入であるため、製品価格が押しなべて高価である。中国製品の場合で、モンゴルにおける価格は中国国内での価格の二倍程度となるのが普通である。そうすると、支出も勘案した場合の収入差は上記の二倍となり、少なくとも経済面での両者の実態格差はさらに広がることになる。つまり、内モンゴルの牧民は否応なく高支出である一方で、高支出であることが可能でもある、という側面も持ち合わせているのである。この差は言うまでもなく、交易相手としての「南の隣人」漢族社会と同一の国家に属しているか、属していないかという差に起因するものである。

もちろん、だからといって内モンゴルの側にも素直に喜べない問題は存在する。その最大のものが、自然環境問題、特に水不足に伴う牧地の劣化の問題である。筆者は現地調

査中、しばしば一九七〇年代などの写真をインフォーマント宅で目にするところがあるが、そこに写されている草原は調査当時のそれよりも大抵草丈が高く、また草の密度も高い。また、今後は牧地の劣化が懸念されるため、飼料生産を拡大する必要があるという見通しを述べていたインフォーマントも存在する。つまり、内モンゴルの牧畜が現在のまま持続可能かどうかが問題とされているのである。実際、内モンゴル西部のエチナ旗では、原因は南に隣接する農耕地帯の過剰用水であるとはいえ、牧地の劣化により放牧が行えないという事態がすでに発生している。

しかし、だとしてもシリントルの内モンゴル牧民が今すぐ、別の牧畜のスタイル、あるいは別の生業を見出すのもまた困難だということのも事実である。彼らは彼らなりの、もう広くない選択肢の中から現在の生活スタイルを構築しているのであり、現在の生存戦略が破綻に瀕さない限り、あえて現状で達成された「満足の最大化」を放棄することは想起困難である。しかも、シリントルで達成されている固定家屋の安楽さ、電気やテレビのある生活、自動車などは、モンゴル国の牧民社会の近年の変化傾向や牧民自身の言説などから判断して、決して内モンゴルを真似ているわけでもないし、そもそも内モンゴルの内実など知らないモンゴル国の牧民にも望ましい、あるいは少なくとも否定すべきものではないと考えられているようである。

もとより、現代という時間を共有している二社会が、直接的な関係を持たなくても似たような嗜好を持つことは不思議なことではない。もちろん、内モンゴルの現実には、モンゴル国の牧民があえて望んではいないだろう牧地の分配という事項なども抱え込んでいるし、根本的な条件の違いも存在する。しかし、その一方で上述のような「シンクロ」現象が発生しうるものだとすれば、内モンゴルの牧畜の現状は「モンゴル国牧畜社会の近未来に起こりうる変化」のある部分を予告しているものと見なすことも不当ではあるまい。

注

〈1〉一般のモンゴル国人にとって「内モンゴル」は中国と以上の意味を持たず、一般の内モンゴル人にとって「モンゴル国」から連想しうるのは伝統、経済困難といった抽象的な単語に過ぎない。ただし、どちらかといえば内モンゴル人のモンゴル国に関する知識の方が、モンゴル国人の内モンゴルに関する知識より豊富である。

〈2〉本論で用いたデータは、以下の現地調査によって収集されたものである。

調査年月 調査地域

一九九七年三月 スフバートル県オンゴンソム
一九九七年七月 スフバートル県オンゴンソム

一九九八年八月 スフバートル県オンゴンソム
一九九九年三月 シリンゴル盟西ウジユムチン旗、シリ
ンホト市、アバガ旗

一九九九年七月八月 スフバートル県オンゴンソム
一九九九年九月一〇月 シリンゴル盟西ウジユムチン
旗、シリンホト市、東スニト旗

二〇〇一年八月 スフバートル県オンゴンソム
二〇〇一年八月 シリンゴル盟アバガ旗

〈3〉 モンゴル国の土地法に関しては、村井宗行「モンゴル
時評」を参照。

〈4〉 オンゴンソムの住民は下位組織として存在する五つ
のバグのいずれかに所属している。そのうち三つが牧民バ
グであり、ソム総面積の大半を占める牧地を三分する形で
領域を有している。残りの二つは定住民のバグであり、定
住地域以外の領域を持たない。

〈5〉 大家畜に関してはモンゴル国だけでなく、内モンゴル
においても放し飼いに近い放牧方法が取られることがあり、
それゆえ人為的コントロールの介入余地が小さく、牧地の
利用面積算出が困難であるため本論では議論の対象から外
す。

〈6〉 モンゴル国では、定住者が家畜を所有している事例は
珍しくない。例えばメスウシを所有して夏場のみ搾乳した
り、ヒツジを所有して必要に応じ自家消費用の肉として利
用したりする。

〈7〉 内モンゴルに関するデータではないが、筆者が二〇〇

二年八月に調査した甘肅省蘭南裕固族自治县における羊毛
の取引事例では一二・六元/kgであった。

〈8〉 一九九九年秋季の相場でも、草原部で二・六元/斤の仔
ヒツジ・仔ヤギが旗中心地へ行くだけで二・八元/斤にな
り、さらに都市部へ行けばさらに高値で取引されるとのこ
とであった。

〈9〉 オンゴンソムの場合、ソム北部の住民のみが現在ヒ
ツジの搾乳を行っている。

参考資料

村井宗行「モンゴル時評」[http://www.aa-e-mansion.com/murai/
page004.html](http://www.aa-e-mansion.com/murai/page004.html) (二〇〇三年九月三〇日閲覧)。

内蒙古自治区測繪局綜合隊『錫林郭勒盟市鎮地名図集』内蒙
古自治区錫林郭勒盟地名委員会、一九九三年。